

川下の風景⑧

～人生は川の流れるように～

米津 達也

【暮らしの履歴書】

44歳ではアラフォーと自嘲し、45歳になると、いよいよアラフィフと言うようになった。首尾よく行っても人生残り半分もないわけだ。そう思うと、時折、これまでの暮らしを振り返る機会も多くなった。上の子は、この冬で18歳になる。進学、就職、いずれにしても家族から巣立つ準備をしている。縁あって9年間教えている専門学校生徒たちも、20代の若者が多い。そうすると、自分の18や20代の頃を思い出す。地方の芸大映像学科を出ても希望の就職が見つからない。焦りよりも、自分のやりたいことにこだわる。10年、20年の将来よりも、目先の居場所を探している。友人の繋がりもあり、東京の小さなプロダクションに拾ってもらった。すぐにでも出てきなさい、と言われ、住む場所も決まらないまま、鞆ひとつで東京の街へ。御徒町の古びたウィークリーマンションに暮らしながら、仕事の合間を縫って部屋探し。慣れないパソコン作業や、国会図書館に通い詰めての資料集め。夜通し高速道路を走って東北撮影行脚など。忙しく充実した日々も、僅か3年余りで終了し、あえなく都落ち。その後、家族を持ち、全く畑違いの福祉の道へ。乳飲み子を抱えての非常勤就労。通信教育で福祉資格の取得へ。児童相談所での実習でこれからの自分に必要な価値観を学び、福祉職として初めて正社員となった介護老人保健施設で介護ビジネスの運営と手法を得る。気が付けば、親が大枚をはたいて入学させてくれた芸大の道とは全く異なる道を歩み、結果的には福祉の職の方がはるかに長くなって45歳となった。思い返せば、顔から火が出るエピソードも多いが、それもこれも、全て自分の物語になっている。

近年、私が歳を重ねてきたので、クライアント家族との年齢も近くなった。脳卒中、癌、難病、様々な事由で介護が必要な状態となるクライアントは、私の親と同じ、70代半ばから80代。初めて介護認定の申請を行い、介護認定調査員がクライアントに対峙するとき、私と同じ歳くらいの息子たちは、親の生活史を知らないことが多い。いつ結婚して、どんな生活をして、趣味は何があって、どんな友人や知人が多くて、食べ物は何が好きで、どんなテレビや本、映画を観るのか。かくゆう私も親の生活史をほとんど知らない。出身地、職業、若い頃の趣味、私が家族の元を巣立ったのは18歳だが、それ以降の両親の暮らしはほとんど知らない。親に「暮らしの履歴書」を残しておいてもらいたい、と節に思うし、それは自分にも当てはまる。この歳になると、決して病気とは無縁ではない。私の両親はどんな物語を残すのか、私はどんな物語を子どもたちに残そうと思うのか、本来は言葉で聞き伝えなければならないが、それも改まった対話は気恥ずかしいものだ。

【クライアントの物語】

滋賀の田舎に育った。平成の大合併でその町の名は無くなったが、特に未練もない。家出同然のように10代で実家を飛び出し、陸上自衛隊に入隊した。厳しく、苦しい訓練、息が詰まる

集団生活に嫌気が差して、僅か4年で辞めた。その後、九州に流れ、ヤクザの真似事をした。真似事が次第に板に付き、それを生業として大阪に渡った。相手が3人ぐらいの喧嘩なら負けたこともない。たくさんのチンピラを従えて、

難波の繁華街を大手を振って歩いた。

結婚は生涯で3人とした。一人目は自衛隊を辞めた後に出会って結婚したが、ヒモのような生活が嫌ですぐに別れた。二人目の妻はフィリピン人で、大阪の飲み屋で出会った。娘が二人生まれた。妻に似て、美人だった上の娘は東京でモデルになり、私に似て血の気が多い下の娘は大阪でプロレスラーになった。妻とは別れたが、今でも娘は心配して金を送ってくれる。結局、三人目の妻とも長く続かなかったが、この歳になっても女に困ったことがない。病院に入院しても、看護師が言い寄ってくるから、断るのが大変だ。

小指を落とすのが嫌で、200万を積んで組を抜けた。今でも京都の祇園界隈を歩いていると、遠くから「兄貴！」と声を掛けられて困る。ヤクザを辞めて、背中に入れ墨は消したが、右腕の龍はそのまま残した。これも思い出のひとつだから。今は、こんな古びたアパートで一人暮らしをしている。周囲には、相変わらずヤクザの友人が多いし、いろいろ世話も焼いてくれる。そうそう、競馬の騎手をやってた時代もあった。駆け出しの頃の武豊と走ったよ。あいつは容赦ないし、ちょっとは負けろよって言ったけど、よく飲みに連れていった。楽しかったよ、いろいろあったけどね。

【私の物語】

最初は数奇な人生もあるもんだなあ、と面白く聞いていた。病院着の右腕や胸元からチラリとぞく入れ墨。その緊張とは裏腹に、本人は至って饒舌に物語を語る。小柄で、柔和な笑顔だが、入れ墨が語るように、どこかで鋭い眼光が覗くだろうかと思にしている。おおよそ娘の下りまでは、そんなもんだろうと思っていたが、

競馬の騎手あたりになると胡散臭くなる。口八丁というが、俄かに信じがたくなる。他人の生活歴に信憑性をそこまで求める必要もないが、何せ末期癌で独居である。一応、家族歴は知っておかないと、困った事態になる。関係機関を突くと、ある程度の記録が出てくるが、娘の話ぐらいから嘘が混じっているようだ。いずれにしても家族とは絶縁状態。生活保護受給中だから、娘から金銭支援をもらったらあかんだろう、と苦笑する。

何で嘘をつくのか、と問い詰めたところで意味もない。騙されたと言えそうだが、別に私に不利益は無いし、周囲がそれで被害を受けているものではない。ひと昔前なら、本人はそんな嘘で女性を騙し、友人を脅していたのかも知れないが、私を知る目の前の老人はそうやって自慢げに人生の物語を語っている。

こうやって生きてきたんだらう。社会的に誉められた仕事ではないし、定職に付かず、割にその日暮らしで生活を行い、パチンコや競馬、競艇に狂って生きてきた。四畳半の古いアパートで、煙草を吸いながら、それでも楽しかった、と語る人生は、やはり本人の虚勢なのかも知れない。でも、少なからず私だって、そんな誉められた人生を歩んできたわけじゃない。虚勢の張った物語も、一つや二つでは収まらない。人が語る暮らしの物語は、そんな謙虚さと、見栄と、欲張りな嘘に満ちている。

2022.11.22 米津達也